

---

# 弟なヤツ

ふじたま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

弟なヤツ

### 【Zコード】

Z7200A

### 【作者名】

ふじたま

### 【あらすじ】

私が好きなヤツ…。眞面目で秀才くんな彼は私の弟で初恋の人…。正反対な性格の義姉弟が織成すラブコメディです。

## 第一話 驚物なヤツ（前書き）

なんか無性に書きたくなったんですね。

他に連載途中なのがあるのに 能力不足なぐせに手を抜けちゃって  
すみません

こつねまつたり更新していく予定ですので…  
気が向いたら読んでやってくれこまセ

## 第一話 墓物なヤツ

「姉ちゃん。ちょっとどこでもいらぬませんか…？」

「無理…今使用中だもん」

「分かりました。ではもう結構です。」

…と言うと自分の手鏡で身だしなみをチェックした後スタスタと玄関に向い

「では行つて参ります。」

と、お母さんに向かつてきちんとお辞儀をして家を出て行く男の子。

ヤツの名前は 倉橋 秀人。くらはし しゅうじん 16歳の高校1年生。いちおつ私の弟  
だつたりする。

…血は繋がつてないんだけどね。

私とヤツとの初めての出会いは 遥る事今から10年前…。

私が7歳。ヤツが6歳の時だった。

私の母の再婚相手であり 現在私の父でもある『パパさん』の連れ子。それが 秀人だつた。

初めてあつた時のヤツの最初の一言。初めて交わした挨拶に びっくりしたのを覚えてる。

「はじめまして…。倉橋秀人と申します。よろしくお願ひ致します

そつとつて、ぺこりと頭を下げた仕草はとても私と、そう年の変わらない少年のものとは思えない程、異様に大人びた雰囲気を纏っていた。

私 この子とうまくやつていけるのかなあー?

…と子供心に、当時7歳の私は不安になつたりしたのだった。

「雪音ー！アンタいつまで鏡と睨めっこしてるの？ー早くしないと遅れるよー！秀人はとっくに出かけたってのに…」

おっと…いけない。昔を思いだしてたら、ついボケつとじぢやつてたよ。

母に怒られ、仕度する手を早め、急いで髪を整えた。

あつー忘れる所だつた、肝心な自己紹介がまだでした。

ん？誰に紹介するのかつて？

…そんな細かい事気にしない気にしない（笑

私の名前は、倉橋 雪音。<sup>くらはし ゆきね</sup> 17歳の高校2年。身長は平均。体重も平均…だと思想したい。因みに顔も平均…

…というか…自分で自分を可愛いとか言える程の自信は持ち合わせてないし…。

一応 ちょっと偏差値高めな進学校に通つてたりするんだよね。  
まあ私の場合はギリギリ合格つて感じだつたんだけど…。

勉強嫌いな私が なんでそんな進学校を受験したかつていうと…

原因は ヤツだつたりする。

ヤツと…

シユウと同じ学校に行きたかつたから…。

シユウは 出会つた頃から 頭もよくて何処か大人びてて、一言で  
いうと 名前の通りの秀才つていうヤツだつた。

ヤツの秀人つて名前は パパさんが付けたらしいけど、まさにその  
通りに育つてパパさんも本望だつ。

そのシユウは 小学生の頃から行きたい高校 大学 果ては、なり  
たい職業まで決めており 既に人生のビジョンつてヤツをしつかり  
と見据えていた。

その高校が 現在私とヤツの通つ 望海高校だつたつて訳。

…で なんで ヤツと同じ学校に行きたかつたかつていうと…

うん… まあ その…

ヤツが…シユウの事が好き… だからテス。

一体 いつから好きなのか自分でもよく分からぬ…。

でも 確か はっきり自覚したのは 中2の時だった気がする。

あれはバレンタインマーの日…。

中学に入つて背も伸び 顔も少しひき締まつて身内の巣廻田で見て  
も格好よくなつたシユウは袋一杯のチョコレートを下げて帰つて來  
た。

それを見て 私は ヤツが以外にモテるという事実にびっくりした  
のと同時に、シユウを他の誰かに取られたく無いと思つて いる自分  
に気付いたのだった。

もし ヤツがそのチョコレートを渡した人の内の誰かと付き合ひの事  
になつたら…  
なんて考えると胸の中がもやもやした気持ちで一杯になつた。

まあ 当の本人は 学校にチョコを持つてくるなんて…。とか バ  
レンタインなんてチョコレート会社の陰謀だ…とかぶつくなつて  
全然関心無かつたみたいだったケド。

そんなヤツが学校でチョコなんか受け取る訳もなく…。  
どうやら チョコレートは机や下駄箱に押し込まれていたりと無理  
やり渡されたものらしかつた。

まあ 無理もないかな…。ヤツに直接チヨコを渡す勇気のある子なんてそうそう居ないと思つし…。

秀人は恋愛といつものに興味がないらしく。 他人…特に女の子に 対して、無愛想といつか無関心といつか… 自分から特に用がない限り話かける様な事は無かつた。

その上 すぐ真面目な性格で物事の倫理をとても重んじている。 要は堅物つてヤツなのだ。

とにかくとつつきにくいヤツ…。  
だけど何故かモテるんだよね…。

眼鏡の奥の切れ長の目な目…。

それに時折 家族や友人の前で見せる無邪気な笑顔。 ビリやりその ギャップに女の子は惹かれるらしい。

そういう 私もそうだつたりするし…

「雪音つーアンタまだ居たのつー? 遅刻しても知らないわよつ

ハツと母の声で 我に返ると…

ヤバッ 後10分しかないつ

雪音の家から学校まで歩いて20分かかる。

「… じょっ… 遅刻したら 大変だよ…」

雪音は 急いで用意を済ませると 家を飛び出し 肩まである髪を揺らしながら走りだした。

「ヤバッ 間に合わなかつた…」

ガシャン

急いでダッシュして来たにもかかわらず 私が門につく直前で無情にもチャイムがなり

風紀委員によつて門が閉められてしまつた。

ちよつとぐらりと待つてくれたつていいじやん…

私が半泣きになりながら肩ではあはあ息をしてくると 背後から聞き慣れた声が聞こえた。

「だからいつもと余裕を持つて家を出た方がいいと言つてるじゃないですか…」

私がバツと振り返ると そこには見慣れたヤツの顔…

「丁度良かつた…。シユウ。あんたなんとかしてよつ 今月これで  
3回田だから遅刻になっちゃうとヤバいのよ…」

ウチの学校では チャイムと同時に校内に入らないと遅刻になり毎  
日 風紀委員が門の所で遅刻者を厳しくチェックしている。  
その上 月に遅刻や無断欠席を3回以上になると反省文を書かなく  
てはいけなくなるのだ。

「風紀委員長の僕が身内だからといって特別扱い出来る訳がないで  
しじう? そんな事では他の委員の方々に示しがつきませんよ。大体  
姉さんは、いつもいつも…」

ああ またいつもお小言が始まっちゃつたよ… これ長いんだよ  
ね…

因みに どうして一年のロイツが風紀委員長なのかといふと…  
委員長を決める会議の時に何故かまだ一年である秀人の名があがり  
全会一致で決まつたらしい。

真面目を絵に描いた様な奴だしなあ。

風紀委員なんてぴつたり過ぎ…

そんな事を思いながら 秀人の顔を見ていると…

「姉ちゃん、ちやんと聞いてるんですか？」

…と、いきなり顔を覗きこまれた。

「わあ… 近い、近い、近い… いきなり顔を覗くよ…

自分の顔が赤くなるのが分かる。

「ん？姉ちゃん？どうかしました？なんか顔赤いですか… 風邪ですか？」

なんて言つておでこに手を当てる。

「だつ 大丈夫だから」

いきなり触つて来ないでお

普段一緒に暮していくにも、いつ突然の行動にはいつもドキッとしてしまつ。

まあ でも ロイツはさきつと 何とも思つてないんだひつなあ…。  
やつ思つと向故か無性に腹が立つてくる…

「ロイツ」

なんかむかついたから、パンパンにしたから…

「こきなり何するんですか？」

やつぱり怒られた。

「あははっ　じゃあねえ～」

また、長いお説教が始まらない内に、私は校舎に向かって走って逃げ出した。

「後で反省文持つて僕の所に来て下さいね～」

…背中からなんか聞こえた気がするケド…

聞こえなかつた事にしどつ…うん。

## 第一話 売物なヤツ（後書き）

読んで頂き ありがとうございました。

## 第一話 説教するヤシ（前書き）

前回分 間違いが何カ所か…  
すみませんでした。

## 第一話 説教するヤツ

「「」あん… 今日ちよつとまだ帰れない…。先に帰つてて…」

放課後 私はいつも一緒に帰つている友人に謝つていた。

「あ～。反省文書かされるんだっけ? しかも弟に…（笑）

「うん…。アイツつたら見逃してくれないんだもん。薄情なヤツ」

「まあ…あのショウ君だしね~。見逃してくれるなんてありえないでしょ…」

ショウの真面目すぎる性格は校内では有名な話で、影では「堅物くん」なんて呼ばれていたりする。

ちよつとの校則違反でも厳しく取り締まるから 恨まれたり疎まれたりする事もあるみたい。

でも、人にどう思われても 自分の意見を曲げたりしない。  
やっぱヤツは 強いんだと思う…。  
ケンカが強いとかじやなくて 心が…。

「まあ…頑張つてね~ 私これからトーーだし そろそろ行くわ…。

」

「うわっ！いいなあ。これからデートとか言ってみたい」

高校に入った時 たまたま同じクラスになつた友人 あ～ちゃんこと  
「渡辺梓」  
は サバサバした性格で 私がドジッたりすると 笑いながらもき  
ちんとフォローしてくれる。  
そんなさつぱりした性格で頼れるジユンちゃんが私は大好きなのだ  
った。

あ～ちゃんは今、年上の大学生と付き合つているらしい。  
会つた事はないけど[写メを見せてもらつた感じでは格好良くて大人  
な感じの人だつた。

大人びたロングの髪で綺麗なあ～ちゃんとお似合いで、並ぶとまさ  
に美男美女つて感じなんだろなあ…。

「あんただつて、愛しのダーリンと反省文<sup>ガ</sup>デートじやん」

「うわっ ちょっとダーリンつて何つ？！しかも反省文<sup>ガ</sup>デートつて  
…。なんかヤダ」

「だつて好きなんでしょう。シウ君事…」

「うっ…うん」

「よしつ じゃあ頑張つて来いつ」

あ～ちゃんが私の背中をバシッと叩いた。

「頑張るって何を頑張れってのあ～ちゃん。反省文苦手なのに…」

自然と溜め息がこぼれてくる。

「何つて…あんたの魅力をアップしてシユウ君の心をガシシヒ…」

「あ～ちゃん…私の魅力って何かなあ…？」

はつきりいって 自分に魅力なんてもんがあるとは思えない…。遠い田をしつつ あ～ちゃんに聞いてみる。

「うう… そ そういう事は自分で考えなさい。…………うん。大丈夫だつて、人間 誰しもどつかしら魅力はあるもんだわ…」

あ～ちゃん… 微妙に逃げなお答えあつがとう…

「無理だよ。アイツ恋愛なんて全く興味ないし…。しかも私の事ただの姉としか見てないよきっと…」

なんか自分で言つててなんだか悲しくなつてくるなあ

「う～ん… でもシユウ君だつて男なんだし…。…………まさかっ?! あ

つち系なのかなつ？」

「え…？あつちつて…？」

「どう…なんとなく予想出来たけど、ちよつと現実逃避してみた…

「だから…男の人しか愛せない…みたいな？」

「言いながら あ～ちゃんはちよつと楽しそうに笑う。

「えつー…シユウがー…そんなのヤダなあ～」

「ただでさえ 手が届きそうもないのに…  
もし そつだつたら私が男に性転換するしか…」

「なにを勝手に変な想像をしてるんですか…？」

「つ？ー」

「私があらぬ想像をして思いつめじる、背後から声が降つてくる。

「え…～シユウ…～アンタいつからそこ…？」

「うわっ なんか変な汗出てきた。」

「つい先程ですが…。というか姉さん何勝手に変な話してるんですけど? 僕にその様な趣味はありませんので…。そもそも今は恋愛など

「いついつを抜かしている場合ではあつませんし……」

はあ～ 良かつたあ  
とつあえず そつち系ではないのね…。  
…つて ちよつと待つたつ 今 セツணにショックな言葉を聞いた  
よつな…。

やつぱ 恋愛に興味なしか…。

喜んだり落ち込んだり 私が百面相をしてると あ～ちゃんがシ  
ュウに声をかける。

「い」めんね。シユウ君。ちよつと冗談で言つてみただけだから…」

「言つていい冗談と悪い冗談があります。」

「はい…。…」めんなさい。…で、その前の話は聞いてない…です  
よね？」

あ～ちゃんが話していくたじたじになるのなんて キツとシユウぐ  
らいだらうな…

反論などさせなことこのような威圧感がシユウにせある。

「僕が来た時には今の話題でしたよ。

…」そのまま話をせとおくと良からぬ噂を立てられそつでしたので止  
めさせてもらいました…。

お話を最中に「お邪魔しまして申し訳あつまセん。」

やつはつとショウガペコつと頭を下げる。

良かった

ショウを好きつて話はとつあえず聞かれてないじこ。

「いえいえ…。 いやいやめんなさい。」  
…あつー苔。 私そんなんに行かなわせや…

えつ?ー!あ~ひさん~!」のタイミングで歸つひさつの~

「じゃあね~」

あ… 行つせつた。

「姉さん…」

呼ばれて 恐る恐る顔を上げる。

「なつ何かなあ~?」

なんてとまけてみたが…。 ひつ もつも怒つてしまふよな?

「今後人の事を憶測で話したりしない様に…。人によつては傷つく人だつているのですよ…。」

「はい…。すみません」

「…で、姉さん。朝のでこパンの件ですが…。」

「うあつ 覚えてたのかつ！？」

「すみませんでした。」

「大体姉さんはいつも後先考えずに行動し過ぎなんです。もつと自分の行動に責任をもつてですね…」

「うわあ～ また始まつちゃつた。こうなつたら 私は ハイつて言いながらひたすら頷く事しか出来ない…」

「… ですので、今後気をつけで下せーね。」

「…はい」

「ふう～ やつと終わつた。」

「では、反省文。書けたら生徒指導室までもつて来て下せーね」

おつ 鬼いい～！

結局 私はこの日 どつぶり田<sup>た</sup>が暮れる頃に やつと家路についた。  
もちろん 帰り道の間中、反省文の誤字についてのシユウのお説教  
を聞かされたのは言つまでもなく…

## 第一話 説教するヤシ（後書き）

読んで頂きありがとうございました。  
また 書きたくなつたら更新します。

## 第三話 鈍いヤツ（前書き）

間あけ過ぎですね…  
すみません

こんなヤツですが見捨てなこでせつてやれこママ（笑）

## 第三話 鈍いヤツ

みーん みんみん みーん…

夏です。夏休みです。

夏休みと言えば…

海にプールにスイカ割り…

花火大会に夏祭り…

楽しいイベント田白押しで…

朝寝坊… 夜更かし 睡眠パラダイス

… な ハズ…

… ですよね？

なのに… 何故？

私は朝っぱらから勉強なんかしてんのよ～！

「姉さん…。手が止まっていますよ…」

私をこんな状況にした元凶… シュウがシャーペンを動かす手を止めて言う。

朝

パンパン

パンパンパンパン

ガチャ

「姉さん…。こつまで寝てるつもりですか…？」

「ん…？何い～？シユウ…？こま…何時い？」

夏休みに入り 朝寝坊する気満々で 昨日遅くまでマンガを読み漁つていた私。

当然起きれる訳も無べ…。

「もう9時ですよ…。

一体何時まで寝てるつもりなんですか？」

ひょっと呆れたよつな口調でシユウが聞いてきた。

「9時……まだ朝……。 朝まで寝るつもつだったの……。  
なんで起きるのよ……」

ああ……聞こい……

眠すぎ……

再び 枕に顔を埋め一度寝の体制を取る私……。

「ちよっと……姉さん……起きなくてね……」

ショウが近寄つて来て枕を奪つて私のベッドの脇に座つた。

「寝つて……。 そんなんじや だらだらと一晩が終わつちやりますよ  
……。 大体夜早く寝ないからいけないんですよ……」

…。

……近いから

「のまま寝たら 寝顔見られちゃうじやん……。

一緒に暮らしてはいるものの パイソの事を好きだと意識してから  
じつも近くで顔を見合わせるのが恥ずかしい……

赤くなる顔を押さえつつ 仕方なく起きあがつた。

「わ……わかったわよー。起きればこんでしょ。起きれば……。」

もう…。なんで「トイシは」こんな真面目なのよー。  
夏休みくらいハメ外せつての…。

ぶつぶつ言こながりやつと起きた私に…

「では、着替えた下に降りて来て下さいね。  
あつー朝食を食べたら勉強ですからね。朝の涼しい内に勉強しない  
と…」

…と 堅物くんシユウの一言。

ゲツ 勉強？？！  
…ありえない。

来年は受験だし 今年は遊びまくひつと思つてたの…

ん？宿題？

もちろんそんなの後回し

… のハズだったのに…

なんでいつなるのや〜？！

まあ ヤツが口ひるやうのはいつもの事だけど…。

でも 去年の夏休みはここまでじや無かつたのに…

ああ… そういやヤツ去年は受験生で朝から夏期講習に行って居なかつたんだ…。

ああ 平和な夏休み… かむばつ〜！

でも…

やつぱり シュウには逆らえないんだよね。  
惚れた弱味つてヤツ？

ヤツに嫌われるのはイヤだし…。

何より逆らつたら後が怖い…

お母さんも完全にヤツの味方だしね。

「ねむね～

しぶしぶ起きた私がリビングに入つていくと…

「ねむね～」

ソファで新聞を読んでるショウしか居なかつた。

「あれ～お母さんせ～？」

「母せんならもうパーティーに行きましたよ」

ああ そつか パートね…。

…つて事は 「イシ」と「入つきつ?

変に意識しちゃつて 勝手に心臓がドキドキしだした。

「「シ パーテーでも飲む?」

「ええ、じゃあ頂きます。」

少し気分を落ち着けようとコーヒーを淹れる私。

「はい。 どーぞ」

バサツと読んでいた新聞をたたみ、コーヒーを受け取ったシユウは

「ありがとうございます」

そう言ってにこにこと微笑んだ。

うわっ 滅多に見れないシユウスマイルッ！  
笑うと可愛いんだよね…。コイツ  
うう…なんか照れる。

マンガに描いたら キラキラしたバックを背負つてそうな シユウの笑顔に焦つた私は自分の分のコーヒーを落としそうになってしまつた。

「うわあっ

「大丈夫ですか？姉さん。ほんとドジなんですから…しおりがない

なあ  
「

…。

誰のせいだと思つてんのよ…。  
人の気も知らないで…

私を見ながら くすつと笑うショウを見て

『ああ やつぱり好きだなあ』

なんて思つてしまふ私。

かなりの重症なのかもしれない。  
これが恋の病つてヤツ?

ねえ シュウ…

私の気持ち知つたらどうする?

やつぱり迷惑…かな?

「食べ終わつたら勉強が待つてますからね。早く食べひやつて下さ  
い。」

私がこんな事思つてるなんてこれっぽっちも思つてないんだううなあ…。

なんか「ヒーラー」がいつもより苦く感じた。

「姉さん…。また手が止まつてますよ。」

「すみません…。」

こつこつしてショウウに起こされ勉強をするハメになつた私。

当然 まだ寝ぼけて頭に勉強なんて入る訳もなく…。

ボーッとしながら 热心に勉強しているショウウの横顔を見つめていた。

「僕の顔に何がついてます?」

うわっヤバい見とれちゃつてた

「うう、ううん。ついてないよ。ただ…」

「ただ?」

「綺麗な顔してるなあ～って思つて…。」

「なつ…。いきなり何言い出すんですか?」

…あ。ちょと照れた?

可愛いといはあるかも…

「べすう…濡れてる?」

「くだらない事言つてないで勉強に集中してやれーっ

誤魔化す様に声を上げるショウ

「だつてえ…。眠くて頭に入んないよ…」

「分からぬといつた教えますから…。」

…年下に 勉強教えて貰つて…

ちよつと悲しくなつてきた。

カリカリ。

しざりくシャーペンの音だけが部屋に響く

「あのれ…」

「なんですか？」

「明日の夜…暇？」

思い切つて聞いてみた。

明日は…

「明日の夜ですか…？」

ああ明日は風紀委員で夏祭りの見回りをする予定ですが…」

「？：見回り？」

なによそれつ？！

一緒に行きたいなって思ってたのに…

「ええ…。夏休みだからつて祭りで夜遅くまでハメを外さない様に…。僕が提案したんです。」

私は心の中で涙を流す

「そつか……。頑張つてね。」

明らかに落胆した声を出した私に

「どうかしました？」

なんて聞いてきた。

## 鈍感男め。.

普段は勘がするジニ<sup>ク</sup>セに 恋愛事になると 鈍いシユウ。

まあ 気付かれても困るんだナビ。

「なんでもなーいっ

私は 半分自棄になりながら 間題集にかじついた。

「姉さんは行くんですか？」

珍しげシユウが手を止めて聞いてきた。

「やのつもつだナビ。シユウには関係ないじちゃん。」

つい キツい態度を取つてしまつ私

ああ なんで いつなるんだろ…。

「誰と行くんですか？」

「…ひとつで

問題集に田を向けたまま、ぼそつと答える

あ～ちゃんは 彼氏と行くらしいし…。  
ショウと行こうと思つてたので他の友達とも行く約束はしてなかつた。

「じゃあ一緒にいて行きますね。

姉さんだけだと無駄使いしそうだし…。どうやらかしこりで心配ですしね…」

へ?

「だつて見回りは?

思わず顔を上げてショウを見た

「見回りは20時からなのでそれまでですが…。」

「うん わかった」

やつたあ～

心の中でガツツポーズしながら、我ながらいい笑顔で返事した。

「あれ？なんか機嫌直りました？  
姉さんお祭り好きですね～」

苦笑しながら 納得しているショウ

やつぱ 鈍いなあ コイツ…。

私はアンタと行けるから嬉しいのに…

まあいいや 一緒に行けるんだし…

「ただし…きちんと勉強を終わらせないと行かせませんからね。」

うわつ やつぱり？

私は それから今までに無いくらいに必死に勉強した。

## 第三話 銃にヤシ（後書き）

読んで下さりありがとうございました。

次回は お祭りの話書く予定です。  
なるべく早く書きます… 多分

## 第四話 黒ねずみヤシ（前編）

続かずぐ書くつもつが やつぱり間が開いてしまいました。  
ほんといこんなん下さいません

## 第四話 黒ねるヤツ

カラーン ロロン カラン

「姉ちゃん…。そんなに走ると転びますよ…。」

「だつて楽しいんだもん」

動きにくい浴衣を着ているにも関わらず、自然と早足になってしま  
う。

ショウと一緒に走つてのもあるけど、お祭り好きな私は浮かれながら歩  
いていた。  
主に屋台が目当てなんだけれどね

私の心は、既に祭りの会場である神社にトロツプ中。

「なに食べようかな～

カラーンロロン

ガツ

「 もやつ 」

「 姉さんてほんと予想通りの行動してくれますよね。だから先程注意したんぢゃないですか‥。」

排水溝の蓋に開いた穴につまづいた私の手を寸での所で掴んでくれたシユウのおかげで倒れずにすんだ‥。

「 すみません‥ 」

呆れながら 説教をしてくるシユウ

「 うう これじゃあどっちが 年上だか分からなイよ‥ 」

「 大体ですね‥。せっかく浴衣を着てるんですからもつとお淑やかに行動した方が‥。その‥‥せっかく似合つているのに‥。」

「 今 最後にぼそっと何か言わなかつた? 」

そう思つて シユウの顔を見ると いつものポーカーフェイスが何処となく赤くなつてゐる気が‥

… つて事は 今のは聞きまちがいじゃないよね？

「ふふっ… ありがと」

私がそつまつと シュウの顔が更に赤くなる。

普段 あんまり女の子と接しないシュウは 例え姉であっても女性を褒めるつていう行為は照れるらしい。

うわっ 可愛い…。

もっとからかってやりたい気もしたけど 丁度祭りのある神社へ到着した。

鳥居を潜ると参道の両端にはたくさんの屋台が並んでおり その上に飾られた提灯が祭りの雰囲気を盛り上げていた。

「シユウ～ 見て見てっ！綿菓子あるよっ！あっ！コンパン飴もっ！ わいバナナチョコ発見っ！」

「食べ物ばかりですね…。先程夕飯食べたじゃないですか…」

「…お腹壊さないで下さこね。」

「…お腹壊さないで下さこね。」

呆れながらも笑うシユウ。

シユウの笑顔を身近で独り占め出来るなんてやっぱり姉で良かったと思つ。

ほんとは恋愛対象になれたら一番だけど…。

「満足満足っ」

両手に リンゴ飴と綿飴を持って、さつきバナナチョコと杏子飴と焼きとうもろこしを食べ終えた私はにこにこしながら言つた。

「それは あれだけ食べれば満足ですよね…。」

苦笑するシユウ。

手にはさつき二人でやつた金魚掬いの金魚を持っている。

私は全然掬え無かったのに、シユウはひよいひよいと5匹も掬つていた。

昔から器用になんでもかまつなくこなすんだよね……」マイツ

「疲れたあ～」

そう言つて神社の石段の脇に座つた私は、そこで屋台に手を向けあるものを見つめた。

「あ～…そう言えばまだジヤガバタ食べて無い～」

「まだ食べる気ですか…？」

「だつて～せつかくお祭りなんだから食べておきたいじゃん?！」

「だつて～じやあつません。そろそろ止めて置いて置いた方が…。」

あれ? 顔が引かつてるよ… シュウ

「シュウの意地悪～」

「意地悪つて… 僕は姉さんの為を思つてですね…。」

…あ～ 分かりました。僕が買ったのを一口あげますから… そんな

田で見ないで下さい…。」

私のじい～つといつ視線に耐え兼ねてシユウが折れた。

食べ物の恨みは恐ろしいのだよつ シュウくん（笑

「じゃあ買つてきますからそこには居て下さいね。」

「はい」

我ながらいい返事だと思つ。

「あれ？ 倉橋じゃん… 一人か？」

「ん？ ああ、田崎があ…。一人じゃないよ。弟と一緒に

いきなり 私に話かけてきたこの人は…

田崎 春人

私と同じクラスで席も後だからたまに話たりする男の子。  
茶色の肩まで伸ばした髪は軽くウェーブがかっていて、私服を見た  
のは初めてだつたけど 今風な格好をしていた。

ポロシャツにジーンズな姿のショウとは対象的な感じがある。

「ああ…。あの『堅物くん』な…。  
そういうや姉弟なんだよな…。」

「義理だけじね…」

「大変だなあ…お前も…」

「へ?」

私の頭の上に?マークが浮かぶ

「アイシロウルセヘ?家でもああなんか?」

「う~ん。まあ…」

私にとっては ヤツと関わる事は嬉しい事なんだけ…

田崎は その外見と生活態度から 風紀委員に目を付けられている  
らしく どうやら シュウの事が苦手みたいだった。

「ところで、田崎は何してたの? 一人?」

「俺をそんな淋しいヤツみたいに言うなよ…。一人じゃ祭り来ねえし。ダチと一緒に来たんだけはぐれちまつて…。」

「迷子?」

私がふつと笑うと 田崎が慌てた。

「ちげつー!アイツらが勝手に居なくなつたんだって…」

「姉さん?」

声に気付いて振り向くと ジャガバタを手にしたショウが立つっていた。

「あつー・ショウおかえり~」

言つて私はジャガバタに飛び付く

「お知り合いでですか?」

「うふ。回りクラスの…」

「ああ…田崎さんですね。お久し振りです。いつも姉さんがお世話を  
になつております。」

私の紹介を遮り、ページと頭を下げながら、シユウが田崎に挨拶す  
る。

「お世話を… 僕別に何もしてねえケド…」

田崎が苦笑する。

「あつーーそろそろ行かなくては…。」

腕時計を見ながら、いきなりシユウが慌てだした。

え?もう時間?

そつ思つて、携帯で時間を確認したら…

19時30分…

確か 見回りつて20時からじや…?

相変わらず 時間に律儀なヤツ  
もつと一緒に居たかったのに…。

「ところで田崎さん今お時間ありますか…？」

がっかりしながら まだジャガバタを食べ続ける私をよそに シュウが田崎に話かける。

「ん？ まあ仲間とぶらぶらしてただけだから暇つちや暇だな…」

「やつですか。 ではお願いがあるのですが…」

「…な なんだよ…。」

シコウからの頼みと聞いて ちょっと警戒しているらしい。

どもりながらも 田崎が答えた。

「実は僕これから風紀委員で見回りをする事になつてまして…。  
よろしければ姉さんを家まで送つて行つて頂けると嬉しいのですが  
…。」

家までは10分くらいの距離ですので…」

「お、別にいいけど…。ところで見回つて？」

「祭りで生徒がハメを外して飲酒や夜間徘徊を行わない様に指導して回るんです。10時以降出歩いていると指導対象になりますよ」

「…マジでか?」

一瞬田崎がやばって感じの顔になる。

「ええ…。ですから姉さんを早めに連れて帰つてくれると助かります。本当は僕が一度送つて帰るつもりだったのですが予想外に時間が経つてしましましたので…。」

「…そりか… 分かつた任せとけ」

「ありがとうございます。助かります。このお礼はいつかしますので…。」

「なら、こないだの遅刻見逃してくれよ。」

「それとこれとは話が別です。」

「…だよな」

「では僕はこれで失礼します。

姉さん、僕の分のジャガバターは家に持つていて下さい。  
あんまり食べ過ぎちゃ駄目ですよ。  
後、家には早めに帰る様に……。」

「はい。分かりました。」

私が返事すると シュウは 「では」と田崎に一礼して去っていった。

## 第四話 濡れたヤツ（後書き）

読んで下さってる皆様いつもありがとうございます。

## 第五話 出番なしなヤシ（前編）

また 間が…

しかも 今回 シュウ君出て来ない…

こんなんですが もうじぱりへお付を貰って頂けると嬉しいです

## 第五話 出番なしなヤツ

「うひ んじゅ 帰るか？  
それとも、むひゅい見てくか？」

田崎が振り向きながら顔をかけてきた

「うへん もひゅいと見たいかも…」

まだかき氷食べてないし

でも「れ以上食べたらショウに怒られそうだなあ…  
一緒に居れないのは淋しいけど 行ってくれてよかつたかも…

「おう！ んじゅ 行うひゅい

田崎が うひゅいながら言つ

いつも学校で見る田崎と違つて今は無邪気な子供みたいな感じ…  
こんな顔もするんだあ…

「なんか楽しそうだね～？お祭り好きなの？」

「おう めっちゃ好き  
なんか意味なくワクワクしねえ?  
それに…」

「それ…?」

「あつ いや… なんでもねえ…」

顔を逸らしながら 田崎が慌てる  
暗いから表情は見えないんだけど…  
どうしたんだろう?

「なあ～に?途中で止めないでよ～。  
気になんじやん」

「気はずんなつて…」

「まあいいや。あれ? そつだ…

ねえ田崎 一緒に来てる友達はいいの?」

「やべつ おれでたつ ちよつと待つてな」

そう言つて 田崎はポケットから携帯を取り出し何処かに電話し始めた

「俺……わりこちよつとな……

ああ？！迷子だあ？！おめえらが勝手に居なくなつたんだろ？  
それより今日の飲み中止にした方がよさそうだぜ……なんか風紀の見回りはいるらしー……おう……んで悪いんだけど俺用事出

来たからもう帰るわ……おう……んじやな

……パタン

電話を切ると 田崎が振り返つて

「スマン。待たせたな」

つて謝りながら携帯をしまう

「ううう。それよりほんとここのの？友達…」

「いいんだつて…どしきせ今日は酒飲めねえし…それに俺 あんなム  
さい奴等より可愛い女の子といった方がいいしつ」

「あははは

「あ……そこ笑ひついんだ……」

「……ん？」

「いや……何でもねえ  
それよりどこに行く？」

「私かき氷食べたいな～

あっ！見て見て田崎つあれ可愛い～

そう言つて 私が指差したのは 射的の屋台に並んでるべまのぬい  
ぐるみ

「……ん？ オッケー！ んじゅ取つてせるよ

「田崎 射的出来んの？」

「任せとけって

「

田崎は 全弾命中させてじわじわとぬいぐるみを後に動かしていく  
最後の一発で見事に落として

「やつたあー すげーい

飛び跳ねて喜んでた私に

「ほい…」

つて くまを手渡してくれた

「ありがとー」

私が大喜びで受け取つたら

「どういたしまして」

田崎がにっこり笑いながら言つた

…「わ

思わず見とれてしまつていた

だつて屈託なく笑った田崎の顔は格好良くてまぶしへ…

…つて 何やつてんだろ私…  
シユウ以外の人にドキドキするなんて…

「んじゃ あ次行くか～？かき氷食いたいんだろ？」

「う…う…」

「うわあ… じもうけつたよ…  
田崎変に思つてないかな？」

「おつ あつたぞ～何食つ？ブルーハワイとか口ん中真つ青になん  
だよな～」

無邪気になっしゃこでる田崎

良かつた…あんまり氣にしてないみたい

\* \*

「やつやつひ帰るか？」

あんまり遅くなると堅物ぐるに怒らわれちまつしな……」

「うふ。 そだね」

やつやつひ 私達は 神社を後にして出立す

カラソ ノロノ

なんだらへーの沈黙…

田崎さつきまで騒いでたのこ…

なんかしゃべってよ…

「……あのさ 倉橋……」

「ん?」

「俺さ……」

「なあに?」

「好きだ…」

「へつ?」

「何を?」

「だから倉橋の事…」

「はつ?え?何?」

「…え?」

「あ~だから…」

「俺…倉橋が好きだ」

「…へ?…わ…私?」

「お前以外に誰が居るんだよ…」

照れて恥ずかと赤くなりながら ガシガシ頭を搔いてる田崎を見る

と…

「冗談じゃない… よね?」

どひじみつ…

「あ…ひ…え?」

田崎じやないけど生まれてこのかた皆白なんてされた事なんかなくて…

いきなりな状況に頭パニックな私

頭が真っ白になつて何て言つていいのか分からぬ

でも 私が好きなのは シュウだし…

わちと田崎に言わなきや…

そつ思つて思い切つて口を開いた

「あの…」

「あつ ちよつ 待てつ まだ返事しないで…」

「…え？ なん… で？」

「「あ」みんな… ちょっと考えてから返事くれると嬉しいんだだけ…」

「… そろそりやその間は、俺… ちょっととも倉橋の心の中に居れるだろ？」

「… なんてな… ただ今返事聞くのが怖いだけ… 俺 カツコ悪いよな

…」

「… たゞそれ…」

「あつ！ お前んち！」」「だろ？  
んじや 僕もう行くな」

「えつ？ なんで私んち知つてんの？」

確か田崎 ウチには来た事ないハズ…

「ん？えつ？ああ…

あの…な

倉橋ちよつと前に風邪で学校休んだ事あつたじやん？」

「うん」

「確かに…2ヶ月くらい前に私は風邪をこじらせて一週間くらい学校を休んだ

「その時に…さ 心配になつてな…で、クラスの女子にお前の家聞いて見舞いに行こうとしたんだ…」

「あれ？でも田崎 見舞いに来てないよね…

「…けどな こざ家の前まで来たら…チャイムが押せなくつてしま…」

「…」

「家の前ウロウロした挙句逃げ帰つた…。  
ストーカーかよつて感じだよな…  
「めん…キモいよな…ははつ」

## 自嘲氣味に笑う田崎

…知らなかつた

田崎が私の事そんなに心配してくれてたなんて…

「ううん… ありがと」

私の事を思つてくれてた田崎の気持ちが嬉しくて 私はにっこり笑つてそう言つた。

「じゃ…じゃあ俺帰るから…返事はいつでもいいからな…  
じゃあ…またな」

そう言いながら 走つて帰つて行く田崎の後姿を見送りながら 私は知らないうちに真つ赤になつていたほっぺたを押された。

## 第五話 出番なしなヤシ（後編）

読んで頂ありがとうございました。

## 第六話 心配性なヤツ（前書き）

間が開き過ぎですね…

しかも 文章が少し?変な気が…

更に 内容 進展してません。

すみません

m ( — ) m

## 第六話 心配性なヤツ

「ひつじよ…

「ひつじよ…」

「ひつじよ…」

「あ… それわかったよ…

いきなりな事態に呆然としていた私は、ひつじよて戻ったのか思い出せないケド、こいつの間にか自分の部屋のベットにペタンと座つていた。

「ゆきーー！ いるの？」

カチャ…

部屋を開けてお母さんが入つて来ても、いわの空な私

「なんだ… 帰つてゐならちゃんと返事しなきこよ…。ただいまも言わないで…

秀人から 何度も連絡あつたのよ。

『姉さん帰つてますか？』 つて…

アンタ 弟に心配かけてんじや ないわよ。

… 聞いてるの？

… つて あり？

アンタ顔赤いケド熱でもあんの？」

「だつ 大丈夫…。  
シユウには私から携帯にメールしとくから…」

「ほんとに大丈夫なの？」

「うん。 平氣

あつ…なんか疲れちゃつたから今日はもひ寝るね…  
おやすみいー」

ふう~

心配するお母さんを部屋から追い出し 盛大な溜め息をつきながら  
ベットに倒れ込んだ。

あつ そうだ…  
シユウに連絡しなきゃ

寝転がつたまま バッグから携帯を取り出して開くと真っ暗な画面…

あれ？ 電源きれてる…  
なんで？？

慌てて携帯の電源ボタンを押すと  
『充電して下さい』の表示…

ヤバい 電池ないし…  
充電しなきゃ…

携帯を充電機に置き、仰向けに寝転びながらまつと天井を見つめてたら…

『…俺…倉橋が好きだ…』

ヤバい…思いだしちゃったよ…

頭にやつさの 田崎の言葉が甦ってきて 更に顔が赤くなるのが分

かる。

田崎… あれは 「冗談じゃない」… よね?

田崎は 私にとつて ただのクラスメイトで、たまに話すぐりこの友達…とも言えない様な関係…

なのに…  
だつたハズなのに…

わざわざから 頭ん中に浮かんでるのは お祭りではしゃぐ田崎の笑  
顔… わざわざの言葉…

私どうしちゃったんだろ…

いつも私の頭の中に居るのは たまにしか見せないショウウの笑顔な  
のに…

ショウ… 私 どうしちゃったのかな…?

\* \* \*

「ただいま」

「あら秀人おかえり お疲れ様」

「姉さん帰つてますか?」

「ええ…帰つて来てるわよ…

あら?連絡なかつた?」

「いえ…

でも無事に帰つてるんですね…。良かった」

「あの子つたら連絡しなかつたのね…  
いつも心配かけてごめんね。まったくどっちが年上か分かんないわ  
よね~」

「いいえ。大事な姉さんですから心配するのは当たり前ですよ。  
…もちろん母さんもですよ。」

「あら~ありがと

あつお風呂洗こむから入つあやつてね

「はい。分かりました」

.....

....ん?

今何時....?

階下からせせやつと聞けたる余話で私は皿を覚ました。

あれ? こいつの間にか寝ちゃつてたんだ....。

シユウ 帰つて来たのかな?

トントン

ほんやつした頭で考へてこると 部屋をノックする音とシユウの声

「姉さん... 入りますよ」

「うん。 えりや~」

「姉さん。携帯繋がらなかつたんですが電源切つてたんで…」

そう言いながら 部屋に入つて来たシユウは 私の顔を見ると何故か言いかけた言葉を止めて ぱつと顔を逸らした。

あれ? どしたんだろ?

シユウ 顔赤いし…

「ね…姉さん」

「ん? なあに?」

「…なんていう格好しているんですか?」

「…え?」

言われて 自分の格好を見ると

乱れた浴衣にはだけた肩…胸元も見えそうに開いている。

バツ

急いでだけている浴衣を直した

「うひ ごめ…

なんか浴衣のまま寝ちゃってたみたいで…

…で、何か用?」

そう言つと シュウは 赤らめた顔を逸らしたまま

「いつ いえ  
姉さんが無事に帰つて來たのなら別にいいんです。じゃあ僕はこれ  
で…  
あつ お風呂沸いてるみたいですから先にどうぞ  
では、おやすみなさい」

と 一いつ焼で部屋を出て行つた。

何やつてんだる…私…

いへり ぱつりとしてたからって シュウにあんな格好で…

…  
…  
…

でも 慌てるのショウ ちょっと可愛かったな

な～んて

何考えてんの 私

ショウ

ドキドキして心臓に やっぱ シュウが好きだなって再確認する

私の中で シュウの居ない人生なんてありえない。

でも  
だけど

常にシュウで一杯なハズの私の胸の中の 端っこに映る田崎の笑顔

なんだろ?

初めて告白なんてされちゃったからだよね… きっと

だあー もひつ

考えてたつてじょうがなこじつ

お風呂入つて寝よ…

## 第六話 心配性なヤツ（後書き）

読んで頂きありがとうございます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7200a/>

---

弟なヤツ

2010年10月28日04時25分発行